
君と彼女とあたし

楓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君と彼女とあたし

【コード】

N0585U

【作者名】

楓

【あらすじ】

私、山岸楓、小学6年生。今、恋をしています。

今に至るそのわけは…。

私、山岸楓は、矢口洋輔やぐちようすけという男の子に恋をしています。けど、洋輔には美緒っていう彼女の存在の女の子がいて…。まあ、そんなこんなで恋をしています。

今は、小学6年生。

この話のきっかけは、2年前、小学4年生のことだった…。

（2年前）

「えーっ！」

「声大きい！洋輔に聞こえちゃうじゃん！」

私は、洋輔のことを珠菜じゆなと綾音に相談したのだった。

まあ、驚くのも無理ないけどね。

確か、昼休みのことだった。

そうしたら、昼休みが終わって掃除が始まった。

（あ、やばっ！私、教室担当だ！）

そう思って、ほうきを取りに行ったら、珠菜と綾音に呼び止められた。

「ど、どうしたの？」

「いや、あのー。洋輔にさ、間違っって中庭で楓が洋輔のこと好きって、洋輔本人に言っっちゃってさー。」

「えーっ！」

慌てているあたしのもとに洋輔が現れた。

「今、中庭で珠菜から聞いたんやけど、楓って俺のこと好きなん？」

（えーっ！な、なんていえばいいんだろっ？とりあえず、言おう！）

「う、うん…。」

教室のど真ん中で、ほぼ告白に近いことを行ったアタシ。これから、どうしようか？

アタシと洋輔は赤くなるし、周りは聞いてなかったみたいだけど…。チヨ―恥ずかしい！それで、1日話せなかった…。

次の日から洋輔が毎日同じことを聞く。

「どう？好きな人変わりそう？変わるんやったら教えてな。」

それから少ししたら、「できた？」の一言。

あたしはいっつも、「できてない！」

この繰り返し。

5年生に入って少ししてからかな？それが、やっと終わった。いいのか悪いのか。

それで、今に至るってわけ。

少年マンガとかの話で盛り上げられるから、今でも普通にしゃべってる。

そんなある日、事件は起こった…。

今に至るそのわけは。。。(後書き)

ぜひぜひ、コメント&意見よろしくですー！

フェスティバルの準備

今、毎年私の小学校である、フェスティバルの準備をしている。
6年生は、お化け屋敷つてなぜか決まってる。

アタシは、トンネル担当で、他にも親友の春香と、美緒、香奈、洋輔も!!

「3・5mくらいかな？」

「いや、長すぎじゃない？」

なんてこと言いながら、洋輔と美緒と春香とあたしのほぼ4人で話し合っていた。

だからかな？香奈がすねちゃって、他のところを手伝いに行った。

そしたら、洋輔が言った。

「どうしたんだろ？香奈。」

香奈が好きなのは、知ってる。

あなたはミス鈍感王子ですか？っていうくらい鈍感。

まあ、いいかー。

12日後ー

またフェスティバルの準備。

アタシは、大体トンネルの中で形が悪いトンネルを支えてた。

「どう？中ってどんな感じ？」

って、洋輔がトンネルの中に…。

トンネルは、3mしかないから距離が近すぎる！

アタシはなんか、気まずくて下を向いてた。

2人で体育座りしてたら、
「もうちよつと、トンネル上にあげてー」
って、春香が言った。

洋輔が体育座りから寝転がって、手を上に伸ばしてた。

（そんな事したらただ手が痛いだけなのに…。）
いろいろな支え方を試してたあたしは、その支え方がつらいのは知
ってた。

しかも、私のすぐそばに、洋輔の顔が…。

（うう、何考えてんだアタシ…。）

「それ、痛いでしょ？」

「いや、支えてるうでを変えれば…。」

「いや、痛いから」

「う、痛い…。」

そしたら次は足を上にあげて、足で支えた。

「いや、それもつらいでしょ？」

「まあね…。」

「元に戻りなよ」

「うん…って、足が抜けない！」

「えー…っ！」

アタシはとりあえず押してみた。

「痛い痛い痛いー！！！」

そんなこんなで、トンネルがガタガタ揺れるし、中は騒がしいから

「ヒューヒューー！！」

「何イチャイチャしてんだよ！」

（し、してないーっ！）

アタシは、美緒がどう思ってるか気になった。

まあ、そのあとすぐ出れたけど…。
アタシとしては、もう少しこのままでも良かったけど…。

なんてね！
フェスティバルも無事終わった。
けど…。

美緒から笑華へ・・・

学校に行ったら美緒が泣いていた。

「どうしたの？」

訳を聞くと、洋輔に振られたらしい。

（どうして？両思いじゃないの？）

私は、春香に相談した。

「あー。なんか、洋輔の好きな人が美緒から笑華に変わったんだって。」

笑華はすごく可愛い子だが、それは表だけ。

裏の顔はいじめとかのグループのリーダー。

男子には表の顔しか見せないのが、笑華の怖いところ・・・

っていうのはウソで、ホントに可愛い女の子。

学年一モテてる子。

（そうか。けどジャマするわけにはいかないなあ）

アタシは悩んだ。

まあ、気にかけないということだ！！

（1週間後）

今日は待ちに待ったプール！！

じゃなくて、もう3度目のプール。

今日は温度が高いから、早く入りたいけど、5～6時間目だから待たないといけない。

給食の時間の事だった。

「今日は、調理員さんが来てくれます。みんなで質問しましょう！質問が返ってくるかもしれせんよ。」

先生が言った。

みんな普通に質問してたのに、アタシのとなりの生なま気が言った。

「初キスはいつですか？」

（何その質問！？）

クラスのひとつが思ったと思う。

「えーと。小学・・・2年生だったかな？」

「えー！ー！ー！」

みんなが驚いた。

そうしたら、

「カップルは何組ぐらいいますか？」

という質問が返ってきた。

アタシの心に矢が3本ぐらい刺さる衝撃。

「学年で言ったら、4、5組くらい。」

誰かが答えた。

アタシはそれっきり、何もしゃべれなかった。

やっとプールだ。

背の順は今日は前の箱ちゃんが見学なのでアタシが一個前へ・・・

（って、洋輔とバディーじゃん！）

春香にウソはつけないアタシ。

仕方なく、バディーになったアタシ。

洋輔もアタシも嫌々だけど。

美緒はどうしたいんだろ？アタシは4日前のことを思い出した。

（4日前）

その日は春香と美緒と市民プールに行っていた。そのとき

「もういいの！洋輔は自分から振ったし、もう好きじゃないから！」
美緒が言った。アタシはもう、洋輔の事が好きじゃないって事にしているから春香と美緒に合わせて「ホント、洋輔うざいー！」と言っていた。

そっか。美緒のどう思ってるかは気にしなくていいんだ。逆に笑華の視線が気になった。美緒より笑華のほうが怖いからだ。

（まあいつか。私は私らしく素直になろう！）

そう思っつて、プールが終わった放課後に春香に本音を言った。

「実はまだ、洋輔の事が好きなんだ。今までウソついてたけど、春香だけにはウソつけないよ！」

「だろうと思った。だって楓すぐ顔に出るんだもん。見てたら分かるよ。」

「アタシって顔に出てるんだ……。皆にはばれてないといいけど……。」

両想いになった事のある、アタシ！？

土曜日、芹菜と春香が泊まりに来た。芹菜は少年マンガが好きで、話の合う友達だ。

お風呂に入って、3人で部屋でゆっくりしていたら

「楓はいつから、洋輔のこと好きなの？」

と、芹菜に聞かれた。

「えーつと。3年生かな？」

「ふーん。」

アタシはふと思った。

(両想いってどんな感じかな?)

そう思ったアタシは春香に聞いてみた。

芹菜は恋をしないし、春香だけがこの中で唯一両想いになった人なわけ。

両想いになったのは、5年生からで好きになった子は梅森翔太^{つめもり}。けど今は、梅森の好きな子がいなくなって現在は片思い中……。

「ねえ、春。両想いってどんな感じ？」

「一言でいえば、学校に行くのが楽しいし、なんか嬉しい。」

「そっかー。片思いしかなくなった事ないから分かんないだよなー。」

「楓、両想いになった事あるでしょ？」

「えっ！そんな事ないよ！何？いつ？誰と？」

(えっ！そんな事ないのに……。)

ちよつと、気になった。アタシと誰が両想いになったのか。

「え、3年の時に洋輔と。」

「え、えっ……！」

「それ、ホント!？」

もちろん、とでも言うように縦にコクンとうなずいた。

知らなかった。アタシと洋輔が両想いになった事があるなんて……。

(けど、知らせてくれなきゃ意味ないじゃん！！知らせてくれたらカップル成立してたかもなのに・・・。)

嬉しい気分のアタシ。そんな時、春香が言った。

「洋輔、笑華を振って美緒とカップルに戻るらしいよ。」

(えっ！)

プールの時に行っていたことはノリで言っていたらしい・・・。

この後どうなるんだろう？アタシ・・・。

おどろきと動揺。かくしきれないアタシ……。

布団に入ったとき、アタシは木曜日の事を思い出していた。

く木曜日く

それは、昼休みの事だった。アタシは給食委員会で、各クラスの（
ていっても、今日はアタシのクラスだけ）ワゴンを見て、お箸の向
きやおかずが残っていないかのチェックをしなければいけない。

6年生の配膳室はいぜんしつをチェックしていたら洋輔が現れた。

「あ、洋輔。食べるのおっそーい！」

「牛乳直しに來ただけだよ！ー食べ終わってる！」

牛乳を直しながら、洋輔が言った。

「なあ、楓。覚えてる？4か5年生の時に楓が食べるの遅くて牛乳
瓶を入れるカゴがないって行った時に俺が牛乳瓶のカゴは配膳室はいぜんしつ
で言ったこと、覚えてる？」

「ああ！覚えてるよ。」

「その時、ホントは教室にあつて、俺が配膳室はいぜんしつに楓より先に行って、
ドアのかけから楓をおどかしたんだよな。」

「うん。ものすごくビックリしたよ！最低！！」

「ははは！けど、おもしろかったなー。楓のおどろき方。」

「なにそれー！」

（あんなに楽しかったのに、また美緒に戻るなんて……。アタシ
と洋輔、一度は両想いになったんだ……。カップル、なれたら良
かった。もうムリだろうけど。）

あの時に戻って、洋輔の気持ちを聞きたかった……。。

アタシの気持ち・・・

あれからなんの変化もなく、夏休みが過ぎた

2学期。

水上大会が中止になり、運動会の練習が始まった。

私は応援団に立候補したのだ！

(小学校生活最後の運動会、やらないわけにはいかない！)

応援団の中で、立候補して応援団長に！！

(頑張るぞー！)

今年は組立体操。

新しい背の順になってからはじめての練習！
アタシは誰とバディーか気になった。

春香や珠菜は男子の背が高くなったのか、前の方へ。

バディーは、予想はしてたけど箱ちゃんだった。

1人技と2人技が終わって、3人組に。

(えっ！洋輔と箱ちゃん！？)

まあいつか。

洋輔に足を持ってもらったり、肩を借りたり……。ちよつと恥ずかしかったけど、意識しないようにした。

組体が終わると、春香が言った。

「楓」。洋輔と3人組なんだあ！美緒にちくつちゃおっかな。」

「いやいや。そういうのじゃないんだから！」

春香はアタシをからかうのが好きだ。

「次の日」

洋輔が足の指を骨折したらしい。

(組体、大丈夫かな……)

運動会まで残り十何日ほど。洋輔は出れない……。

3人組は変わった。

(ちよつと残念……。いや、アタシは諦めたんだ！)

本当は好きだけど、その気持ちを押し殺して過ごしている。

「1週間後の木曜日」

アタシは首を痛めてたので、見学……。

「あゝあ。初めて外で、組体なのになあ……。」

洋輔はもちろん見学。

「楓、見学？」

「あ、うん。」

「そっかあ。」

5、6時間目で外で体育。

5時間目は組体だったけど、6時間目は騎馬戦きはせん。

(やりたかった。)

先生に騎馬戦の並び方だけ覚えて欲しいから出てきて、と言われた。

洋輔も出てきた。

(やるつもりなんだ(笑))

騎馬戦は4人1組。背の順で背が低い3人が騎手(上に乗る人)、残りは背の順で……。

(って、また洋輔と箱ちゃん!?)

騎手は上に乗るから、アタシと洋輔と箱ちゃんが馬けいた騎手は圭太。

で、洋輔が前にいて、箱ちゃんとあたしが後ろ。

あるペアを前に出して、先生が見本を見せた。

先生が説明を始めた。

「前の人は後ろに人と手をつないでください。」

(って、えーーーーっ!)

洋輔はどう思ったのか知らないけど、手をつないだ。

しかも、普通に手をつなぐのではなくて、指が全部交差する、いわゆる恋人繋ぎ。

周りの目が気になった。

みんな、気にしてなかった。

ただ一人を除いては・・・。

春香がこっちを見てニヤニヤしている。

（あ、絶対からかわれるわ〜。）

あつたかい。友達とも手をつなぐことがないからかな？
いや、本心は好きだからだな。

ちよっぴりどころか、すごく照れた。

圭太はとても強かった。

（本番もがんばろう！）

洋輔、本番も出てくれたらな〜。

なんて思ってたたら、洋輔が言った。

「なあ楓。圭太、マジ強かったやんな！
アタシは言った。」

「うん！本番も頑張つてな！圭太！」

洋輔の後ろにいる美緒の顔が見えた。

（ちよっぴりこわい・・・。）

圭太の顔が赤かった。

(照れてる、可愛い)

予想通り、春香にからかわれた。

また、「美緒にちくつちやおっかなろ。」

そう言つて、ちくつたことがないのが春香のいいところ。

「次の日」

次の時間は組体だ！

首の痛みが引いてきたから、今日は見学しない。

「楓、見学じゃないんや。首大丈夫？」

「う、うん。」

心配してくれて嬉しかった。

でもそんなこと言えない。

今日は騎馬戦がない。

手、繋ぎたいな……。

でもそんなこと言えない。

こう言つて、気持ちを押し殺す。

(がんばるぞ！アタシ！)

応援団長のアタシ

運動会まであと1週間ほどで、洋輔が出られることになった。

(3人組とか、どうなるのかな・・・。)
予想は外れて、前のまま。洋輔は背の高い後ろの人たちと組体をしている。

騎馬戦も恥ずかしながらの練習。一回戦は戦って、笛がなったときに残っている気張が多かったら勝ち。二回戦は個人戦、一対一だ。三回戦は大将戦、どちらかの大将の帽子が取られたら終わり。

毎度毎度、白が4・0で勝っていた。

(本番も頑張るぞー！！)

ー運動会当日ー

アタシは応援団長としての仕事がたくさんあった。

紅白得点種目は、すべて応援なのだ。

「フレーフレー白組！」

アタシは精一杯の声を張り上げる白組の応援団の子達も、頑張っていた。

騎馬戦、白組のアタシたちは余裕だった。だって、勝つし。しかし！！本番はそうはいかず、2・3で負けてしまった。最近、よしもと新喜劇にハマっているアタシは思わず心の中で言っ

た。
(ありえっへーん！)

最後まで頑張れ！

話の前に一つ。今日から10月だから、席替えをした！春香と同じ班になれた！洋介と席が・・・近かった。特に給食とかに机を班の形にするときは。

まあいろいろあったが、最後は組体！

白組の低学年の前で技が完成すると、アタシに向かって「団長すこーい！」の聲がたくさんとんできた。

ここまで人に褒められて嬉しいのは久しぶりかもしれない。今まで練習してきてよかった。そう思えた。

そして最後は得点発表！！！！

アタシは得点係だから、得点板を隠している布を取らなければならぬ。

「得点を発表します。」得点係の芹菜が言う。

「得点板を見ましよう。」これは、春香が言う。

(どっちが勝つか・・・。小学校生活最後の運動会。負けたくないっっ！)

ドドドドドドドドドドドーン！

太鼓の音が、運動場に響きわたる。

「せーの！」

布をはがす！

(白は13点、赤は・・・)

心の中で数え終わらないうちに、得点係が言った。

「赤組！13点、白組！13点」

（えーっ！）

「よって、引き分けです。。。」

春香も芹菜も、練習用の紙に書いてあった〇組の優勝です、ではなく、驚きが隠せないようだ。

教室に帰って、「勝ちたかったな！。」なんて言ったら、洋輔が言った。

「ま、最後の運動会、どっちも恨みっこなしで終わったからいいんじゃないの？」

（たまにはいいこと言っじゃん。洋輔！）

さあ、火曜日から頑張ろう！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0585u/>

君と彼女とあたし

2011年10月12日15時53分発行